

SEEDS



No.228 秋号
2015 /

自然特集

カラフトマスを釣る

活動レポート

IWMCとタウンミーティング

知床・人・インタビュー第24回
桜井あけみさん

スタッフの本棚 第18回
青春を山に賭けて

知床財団購買部
ひぐまのごはんで絵を描く

知床財団この一品 第7回
行き過ぎたピンテ文化

写真：遡上するカラフトマス。水面から背ビレが見える。

IWMC とタウンミーティング

| 文 - 増田 泰 事務局長 / 石名坂 豪 保護管理研究係長 |



in 札幌



石名坂 豪

IWMCとは？

「IWMC」とは、International Wildlife Management Congress の略で、「国際野生動物管理学会」と訳されています。The Wildlife Society (アメリカ野生動物学会) が数年前に世界各地で開催している国際学会です。今年、日本哺乳類学会との合同で、7月に札幌で開催されました。実は、10年前の2005年に開催されたIWMC9 (第9回国際哺乳類学会) の際、札幌コンベンションセンター内の、奇しくも全く同じ会場で、「知床・イエローストーン 野生をめぐる2つの国立公園の物語」と銘打ったシンポジウムが開かれました。今回のIWMCの知床シンポジウムや、知床へ移動した後の現地視察とタウンミーティングは、「その後の10年間に知床で何が起き、どのように変わったのか? 課題は何か?」について、海外の世界自然遺産に関わっている研究者を含む関係者間で認識を共

有し、知床の次の10年に向けた提言をまとめる目的で企画されたものです。知床財団の職員は10年前と同様に、今回も学会シンポジウムでの英語発表や現地視察のコーディネート等に携わりました。

私たちは、学会のような場で、専門分野の人々へ知床の自然を科学的に伝えることは、ひろく一般の人々に分かり易く伝えることと等しく重要と考えています。各種学会への出席は「知床を知り、守り、伝える」現地実動部隊としての知床財団の存在感を示すよい機会です。また、普段は日本の北東端にいる私たちがその道の専門家と直接顔を合わせて情報や知見を共有したり、あるいは議論して、それらを私たちの普段の仕事に還元できる数少ない機会でもあるのです。

発表に使ったスライドの一部

発表の内容

今回の学会には47カ国から1202人が参加し、札幌コンベンションセンター内の会場で、86の口頭発表セッションが開かれました(ポスター発表は270点)。私は54番目のセッションとして開催されたシンポジウム「知床国立公園における野生動物の保全と管理、2015年版 イエローストーン、シホテアリンおよび知床の経験と知識の共有」の演者の一人として、「知床国立公園にお

……発表までの裏話……
 実は私、今回のIWMCでは、知床財団が独自事業で取り組んでいるトド調査の結果をまとめて、ポスター発表をするつもりでいました。ところが、知床シンポジウムでのエゾシカに関する口頭発表という大役をいただいたため、「スボラな自分にはトドとシカ、水陸両方の英語でのとりまとは無理！」と早々に判断、エゾシカ一本に絞った次第です。

るエゾシカの保全と管理」というタイトルで25分弱の英語口頭発表を行いました。

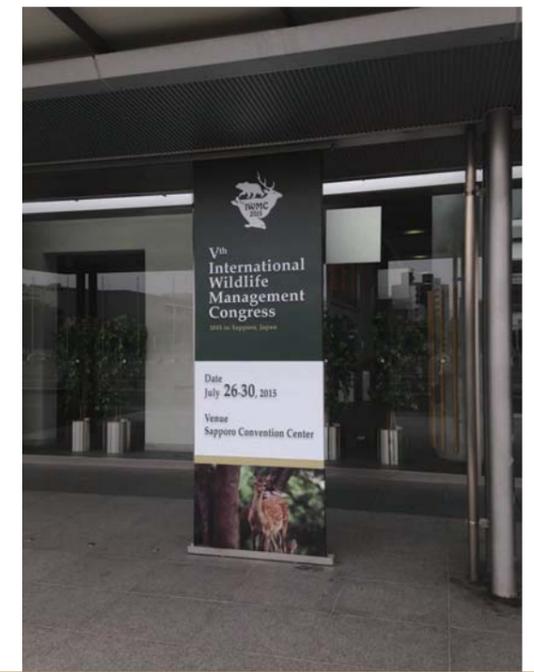
発表では、知床のエゾシカが明治時代の豪雪で一旦絶滅状態となり、阿寒方面に生き残っていた集団が約100年を経て、1970年代に知床へ再分布したことや、1997年まで可猟区の中でもメスジカが禁止だったように、最近まで長く「保護の時代」が続いていた歴史に、まず触れました。

次いでこのような保護の結果、エゾシカの個体数が急増し、知床の森林や草原の姿が著しく変わってきたこと、2004年に設置された専門家による助言機関※において様々な議論が行われたこと、その結果に基づき、2007年から知床岬を皮切りに、国立公園内でもエゾシカの捕獲事業が環境省により開始され、最近「エゾシカ管理の時代」に突入していることを述べました。

また、知床財団は現場でのエゾシカ捕獲業務を担っていること、知床の一部の地区では捕獲事業の成果で植生が回復しつつあること、などについても紹介しました。

7/31-8/3
知床タウンミーティング
現地視察

7/29
IWMC での知床関連シンポジウム



※知床世界自然遺産地域科学委員会 エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ

in 知床



増田 泰

タウンミーティング

世界自然遺産では、先輩にあたるイエローストーン国立公園で活躍されている専門家から、直接お話を聞く機会は普段はなかなかありません。そこでせっかくの機会ですから、札幌での学会後、イエローストーンの専門家に知床までお越しいただき、知床の住民が互いの現状についての情報を交換したり、意見を述べ合う場「タウンミーティング」を開催しました。さらに今回は、将来の知床を担う地元高校生にも参加していただきました。



マネン氏によるイエローストーンのクマ管理の紹介

タウンミーティングの様子

会場ではゲストと参加者という区別なく同じテーブルを囲み、顔を見合わせながらのミーティングでした。第1部では最初に米国地理研究所上席野生生物研究員のフランク・ヴァン・マネンさんからイエローストーンにおけるクマ管理の現状について紹介いただきました。

続いて両町の高校生からの報告があり、羅臼高校からは羅臼町の現状と、幼稚園から小中高校まで一貫して行われているクマ学習の紹介、そしてヒグマとの共存を図るために自分たちでできることが何かという発表がありました。斜里高校からは知床世界自然遺産を学ぶ独自カリキュラム「知床自然学習」「知床自然概論」から得た学習成果についての発表がありました。

最後に地元を代表して、羅臼からは人とヒグマの生活圏が接する羅臼町特有の事情を抱える中で共存することの難しさについて、斜里からは町において官民一体となって取り組むヒグマえさやり禁止キャンペーンについての発表が

ありました。休憩をくださった後の第2部では、会場全体で質疑と意見交換を行いました。



羅臼町の高校生による発表



意見交換の様子

の遅れに原因があると疑われています。

また、ルシヤ地区への途上、カムイワッカのマイカー規制区間を通過しましたが、これまで何度も知床を訪問しているテール・マツカロー博士は、「このようなシステムが導入されたことは、過去と比べると非常に感慨深い」とコメントしていました。

4日間の交流からみえたもの

「イエローストーンと知床」

イエローストーンの専門家との交流の中で見えてきたものは、クマやシカといった野生動物と人の間に抱える課題は、知床もイエローストーンも同じであるということでした。

クマについていえば、イエローストーンにおいても過去には餌付けの問題や、クマを見たい観光客の過度なクマへの接近といった知床と同様の課題を抱え、紆余曲折を経て解決方法を見出してきた歴史がありました。一方で、知床との大きな違いは土地の広さです。広大なイエローストーンでは保護区と人の生活圏は離れており、保護区内でクマの人慣れが進んでも、保護区外の居住エリアへの直接的影響はあまりありません。イエローストーンの専門家も、これほどヒグマが高密度に生息していることがほとんど事故がないことはむしろ驚きで、クマと人の

生活圏が近接した知床では、その状況を考慮した独自の管理手法を見出す必要があるとの指摘がありました。

また、シカについては、イエローストーンではこの10年、シカ類の本来の捕食者でありながら絶滅したオオカミを人の手で再導入し、一方で知床では、人自らがシカを捕獲することで増えすぎたシカ類の数を調節する試みを行ってきました。手法は違いますが、人が手を加えた点ではある意味同じと言えるでしょう。そしてイエローストーンにおいて賛否両論がある中で最終的にオオカミを再導入できたのもまた、その土地の広大さという知床との違いなのかもしれません。

現地視察とタウンミーティングでは、地元高校生も専門家の皆さんと行動を共にし、実際に現場を見て、考えました。ルシヤの現地視察の後、「ルシヤで瘦せたヒグマを見て、人が手を出さずべきでないかわかっていてもどうにかしてやりたいと思った。野生動物との



カラフトマスが遡上する岩尾別川河口を視察するエクスカーション参加者たち

知床での現地視察

タウンミーティングに先駆けて知床での現地視察がありました。参加者は、知床五湖の高架木道、岩尾別川河口、ウトロ高原の農地、斜里町ルシヤ地区、羅臼町ルサ地区、同海岸町地区、羅臼ビジターセンター等を訪ねました。ルシヤ地区では、夏の餌不足によって激ヤセし、ほとんど動けない状態の親子グマを見ました。これには、地元の高校生をはじめ、視察参加者の皆さんは大変衝撃を受けていました。このような夏の餌不足は、増えすぎたエゾシカがヒグマの好む植物を先に食いつくしたことや、温暖化によるカラフトマスの遡上

つきあい方の難しさを感じた。「シカによる植生破壊でヒグマの餌となる植物が減り、影響を受けていることに衝撃を受けた」、「野生動物の管理は町や北海道だけではなく、国全体で考えなくてはならない問題」といった彼らの感想を聞いて、次の若い世代が海外の状況を見聞したり、実際の現場を見て得たものを自分のものとして吸収してくれたことに嬉しくなりました。海外の専門家の皆さんも、地元高校生が人と野生動物との関係について真剣に考えている姿を見て、感心されることも、頼もしく思われたようです。今回改めて感じたことは、海外の事例をそのまま模倣するのではなく、それらを参考にして知床の地理的、社会的条件にマッチした独自の仕組みを作らなければならないということと、持続的に世界自然遺産を守っていくためには、将来その任を担う次の世代を育てていかなければならないということです。これらはまさに知床財団がやらなければならないことであり、次の10年に向けて我々のめざす目標となりました。



イエローストーン国立公園